

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 3 月 31 日現在

機関番号：11301

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010 ～ 2011

課題番号：22792214

研究課題名（和文）

妊娠期の快適性と出産満足度・育児行動との関連について

研究課題名（英文）

The relationship among comfort in pregnancy, birth satisfaction, and childrearing behavior

研究代表者

中村 康香（NAKAMURA YASUKA）

東北大学・大学院医学系研究科・助教

研究者番号：10332941

研究成果の概要（和文）：

本研究では、妊娠期の快適性に関する尺度の開発と、その信頼性・妥当性の検証を行うとともに、妊娠期の快適性と出産満足度・育児行動との関連について、①妊娠期の快適性が高い女性は出産満足度が高い、②妊娠期の快適性が高い女性は肯定的な育児行動を示す、の2つの仮説検証を行った。その結果、全体として妊娠期の快適性と出産満足度、妊娠期の快適性と育児行動には有意な正の相関が認められ、2つの仮説は検証された。それぞれの下位尺度ごとに、分析したところ、初産婦と経産婦では異なる特徴が認められた。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study was to develop Pregnancy Comfort Scale (PCS) and examine the relationship among the comfort in pregnancy period, the birth satisfaction, and childrearing behavior. The hypotheses were that women who had high comfort in pregnancy showed high birth satisfaction, and showed more positive childrearing behavior. As a result of that significantly positive correlation were showed among those variables, then those hypotheses were verified. As a result of analysis of the each subscale, different character was presented in primipara and multipara.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2011 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：ウイメンズヘルス看護学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：妊婦、快適性、出産満足、育児行動、尺度開発

1. 研究開始当初の背景

| 近年、少子高齢化時代の到来を迎え、合計特

殊出生率は1.34(2007)となり、少子化の進展に歯止めをかけることが求められている。そのような流れを受け、日本政府は「健やか親子21」という21世紀にむけての母子保健ビジョンを策定した(厚生労働省,2001)。その主要課題の1つに「妊娠・出産に関する安全性と快適さの確保と不妊への支援」が掲げられている。妊娠・出産の安全性に関しては、周産期ネットワークの充実も図られ、妊産婦死亡率は、出生10万あたり4.4(厚生労働省,2005)と世界のトップレベルとなっている。一方、妊娠・出産の満足度に関しては、91.4%に達しているものの、その評価は出生した児の健康状態といった1つの結果に起因するところが大きいと、評価方法の検討が必要であると述べられている(健やか親子21報告書,2006)。また妊娠期と出産について一緒に評価していることにも疑問が残る。

妊娠期の不安が切迫流産・切迫早産や産後うつ病に関連していること(米山,2008)、妊娠期の快適性が妊娠の受容を高めること(中村,2008)など、快適な「妊娠生活」の重要性が報告されている。妊娠期に関する研究においては、不安やマイナートラブルの軽減に着目した研究(花沢,1992; Einarson A,2009)が多く、妊婦の快適とは、妊娠の危機的状況の軽減であったり、不安や不快症状といった身体的苦痛がないこと、また施設設備やアメニティの充実としてとらえているのが多くを占めており、妊娠期の主観的な満足や快適性に焦点を当てている研究は少ない。研究者(2005,2008)はローリスク初産婦を対象として縦断的調査を行い、妊婦の快適さの体験という妊娠期に体験する肯定的な側面の特徴を質的データより明らかにしている。そしてその肯定的側面に焦点を当て、妊娠期の快適性を促すことで、妊娠の受容を高めることを目的とした新たな視点からの看護介入を妊娠初期から妊娠末期まで継続的に行い、その有効性を検証した(中村,2004,2007)。しかし、質的なデータによる評価のため、妊娠期の快適性を数量化するには至っておらず、臨床へ応用した場合、評価がケア提供者により異なる可能性もある。しかしこれらの質的結果を基礎にして、臨床で幅広く使用することのできる、簡便で、短時間に、そして客観的に評価のできる尺度を作成することが可能であり、その作成は急務の課題の一つである。

出産の満足度を高める影響因子としては、分娩時の安全性が確保されることが前提条件(中野ら,2003)であるが、分娩様式、分娩所要時間、夫/家族のサポート、分娩時の処置やケア、医療者の態度、内的コントロール感(Goodmanら,2004; 中野ら,2003; 常盤ら,2001; Waldenstöm,1996など)などが明らかになっている。しかしこれらの要因は分娩期における様々な変数である。妊娠期に関連

する要因との関連性を報告している研究は、妊娠末期の出産準備感(片岡ら,2009)やセルフケア行動(清水ら,2008)があるが、会議録にとどまっている。また関塚ら(2007)はストレス対処能力と出産満足度の関連を妊娠末期に調査しているが、妊娠期としての評価ではない。このような出産の満足度が産後の抑うつや母性意識、育児困難感(竹原ら,2009)といった産褥期に与える影響も明らかとなっているが、横断的調査もしくは出産後からの縦断的調査であり、妊娠期からの縦断的調査を行っている研究はほとんど見当たらない。妊娠期間の体験は、出産や育児にも反映するといわれている。また近年社会問題となっている児童虐待の問題についても、その原因の一つに、望まない妊娠や子供が嫌い(高窪ら,2005)など、女性が妊娠を十分受容できないままに子供を産み育てているという現状もあり、妊娠期からの関連性が言われている。つまり、妊娠期に妊娠を自分のこととして受容し、快適な妊娠期をおくることができれば、満足ある出産や、その後の育児への前向きな態度や産後の抑うつの予防につながるのではないかと考えるが、その関連性についての研究報告はない。

2. 研究の目的

以上より、本研究の目的を以下の2点とした。

研究1. 妊娠期の快適性に関する尺度の開発と、その信頼性・妥当性の検証

研究2. 妊娠期の快適性と出産満足度・育児行動との関連を検証する

研究仮説を、(1) 妊娠期の快適性が高い女性は出産満足度が高い、(2) 妊娠期の快適性が高い女性は肯定的な育児行動を示す、とした。

3. 研究の方法

研究1. 妊婦健診を取り扱う6医療施設において、外来通院している妊婦613名を対象に質問紙調査を行い、妊娠期快適性尺度の開発を行った。

研究2. 妊娠初期から産後1ヶ月まで同じ施設で受診する見込みのある妊婦300名程度を対象に、質問紙調査を行った。調査内容は、妊娠期の快適性(妊娠期快適性尺度)、抑うつ、分娩の満足度(出産大県自己評価尺度)、育児行動(母親役割の自信尺度、母親であることの満足感尺度)、基本的属性、今回の妊娠・分娩経過である。

4. 研究成果

研究1. 最終的に5因子35項目の尺度それぞれの因子は、「父親へと成長する夫との関係性の深まり(以下『夫』)」「わが子の動きによる相互作用(以下『胎児』)」「周囲との交流による支え(以下『周囲』)」「母親になる実

感とわが子への愛着(以下『母親』)」「妊娠生活において変化する自分(以下『自分』)」であった。累積寄与率は62.85%であった。信頼性の検証として、尺度全体の Cronbach α 係数=.95、それぞれの因子においても、 α =.81-.92 であった。また各因子と合計得点の相関係数 r =.74-.85 と有意な強い相関、各因子間の相関係数は r =.33-.68 と有意な中程度以下の相関が認められた。

妥当性の検証として、VAS との相関係数 r =.32-.57 と有意な中程度の相関があり、日本語版PSEQとの相関係数 r =.34-.62 と有意な中程度の相関が認められた。また、SF-36v2TM の各下位尺度と一部の因子、もしくはすべての因子や合計得点との間に有意な正の相関が認められ、基準関連妥当性が確保された。そのほか、収束妥当性、全体の尺度化成功率は99.4%であることから弁別妥当性も確認された。

研究2.平成24年2月1日現在で、妊娠末期、分娩時、1ヶ月健診時のすべてに回答した女性86名を分析対象者とした。分娩時の母親の平均年齢は32.8歳、夫の平均年齢は32.9歳であった。初産婦が約4割であり、対象者の9割近くが単胎妊娠であった。初産産を比較した結果、母の学歴において経産婦のほうが16年以上教育を受けた割合が有意に多く、また出産クラスに参加せず、夫の立会もなかった割合が有意に多かった。そのほかの背景については、初産産で有意な差は認められなかった。

仮説検証については、2つの仮説とも全体として妊娠期の快適性と出産満足度、妊娠期の快適性と、育児行動には有意な正の相関が認められ、仮説は検証された。それぞれの各下位尺度ごとに、分析したところ、初産婦と経産婦では、異なる特徴が認められた。初産婦においては、妊娠末期の快適性は周囲との交流による支えや母親になる実感とわが子への愛着、妊娠生活において変化する自分に関する側面が出産体験における母親としての自覚が高いことや、妊娠末期の母親になる実感とわが子への愛着に関する快適性が、産後の母親としての満足感、特に母親としての自己肯定感が高いことと関連していた。経産婦においては、様々な側面の快適性が出産体験の様々な側面の自己評価や産褥期の母親であることの満足感が高いことと関連していた。また、産褥期の母親役割の自信においては、妊娠期の父親へ成長する夫との関係性の深まり、わが子の動きによる相互作用、周囲との交流による支えに関連する快適性の高いことが、日常生活の中でわが子の欲求を解釈・推測でき、その欲求に応じて生理的欲求を満たし、啼泣しているわが子に対応できることと関連していた。

以上のことを踏まえ、初産婦に対して妊娠

期には、母親になる実感をわが子への愛着に関する快適性を強化していく看護援助が有効であり、さらに実際にわが子が生まれた産褥期になってから、母親役割の自信や、母親であることの満足感を促す看護援助を提供することが必要である。そして経産婦に対しては、妊娠期にさまざまな側面の快適性の中でも、夫や周囲のサポートに関連する快適性を高める看護援助が有効であることが考えられた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

1. 武石陽子, 中村康香, 跡上富美, 吉沢豊予子: 妊娠期の快適性に関する尺度の開発, 日本母性看護学会誌(査読有), 11(1), 11-18, 2011
2. Yasuka Nakamura: Nursing intervention to enhance acceptance of pregnancy in first-time mothers: Focusing on the comfortable experiences of pregnant women, Japan Journal of Nursing Science (査読有), 7(1), 29-36, 2010

[学会発表] (計7件)

1. Yoko Takeishi, Yasuka Nakamura, Naoko Ito, Fumi Atogami, Toyoko Yoshizawa: Comparing pregnant comfort among first, second and third trimester: Using pregnant comfort scale, The 15th EAFONS. Singapore, 2012.2.22-23
2. 中村康香, 武石陽子, 跡上富美, 吉沢豊予子: 妊娠経過における妊婦の快適性の変化~妊娠初期と妊娠中期の比較~, 第31回日本看護科学学会, 2011.12. 2-3, 高知
3. 武石陽子, 中村康香, 跡上富美, 吉沢豊予子: 妊娠中期における快適性の特徴, 第31回日本看護科学学会, 2011.12. 2-3, 高知
4. 中村康香, 跡上富美, 吉沢豊予子, 武石陽子, 伊藤直子: 妊娠初期における妊娠期快適性の特徴`初産産を比較して`, 第13回日本母性看護学会学術集会, 2011.6.11, 栃木
5. 中村康香: 妊娠期の快適性と心理社会的適応について, 第1回統合産婦人科学研究合同シンポジウム, 2011.2.22, 仙台
6. 武石陽子, 中村康香, 跡上富美, 吉沢豊予子: 妊娠時期および背景による妊娠期の快適性の特徴 - 妊娠期快適性尺度を用いて -, 第30回日本看護科学学会, 2010.12.3, 札幌

7. 武石陽子, 吉沢豊予子, 跡上富美, 中村康香: 妊娠期の快適性に関する尺度の開発, 第12回日本母性看護学会学術集会, 2010.6.19, 津(三重)

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況 (計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村 康香 (NAKAMURA YASUKA)

東北大学・大学院医学系研究科・助教

研究者番号: 10332941

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: